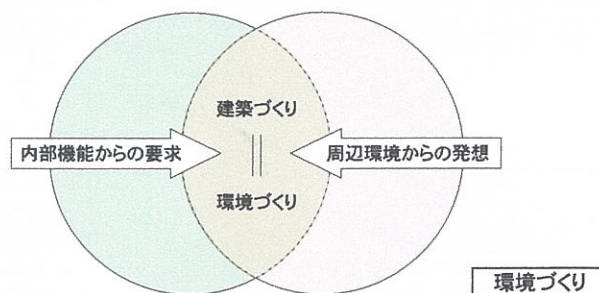


## 様式12 児童自立支援施設としての機能発揮・環境配慮

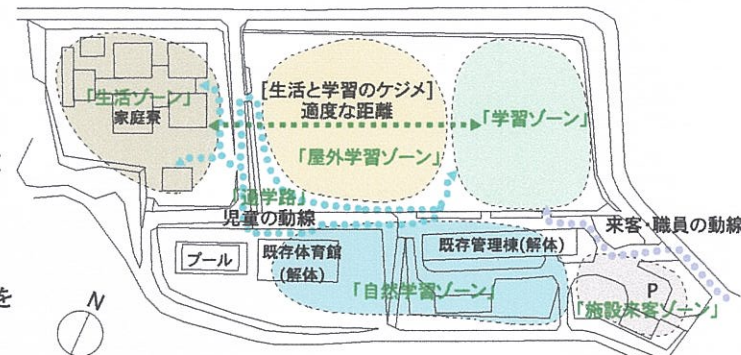
### ■環境づくりから発想する

建築づくりは環境づくり。場所の地形、方位、風景、気候といった周辺環境から自然発生的に生じるかたちと、学校という内部機能からの要求の二面性を素直に結び付け、建築そのものの形態が自己主張することのない環境デザインを追求すべきだと思います。環境的発想から出発した空間が永く生きながらえる、建築の歴史はそれを物語っています。このような本質的な空間づくりを行い、人と自然を結ぶ装置を計画すべきだと思います。



### ■まちづくりのなかでの学校 …〈街並・風景〉

学校は、地域のコミュニケーション形成や生涯学習、災害時の避難場所など、近隣住民全員のふれあいの場所や活動の場所として、まちづくりの核として考える必要があります。歴史や街並に融合する新たな風景が形成され、人々が誇りに思い、愛着心が生まれる施設とすることが大切です。



### ■周辺環境とのネットワーク

本計画では、周辺の環境とのネットワークをもった新たな環境体を創出させることが大切です。

### ○既存施設とのネットワーク …〈登下校とけじめ〉

利便性を最優先すれば、グラウンド西側に今回の施設を配置し、家庭寮から最小限の移動で学習空間とつなぐ計画も可能です。しかし、日々の生活の場と学習の場には、適度な距離を設け、登下校を行い、「けじめ」をつけることが大切だと考えます。そこで、グラウンドを大きな広場にたとえ、その東側に今回の学習ゾーンをまとめ、双方で挟む配置を提案します。既存の正門・駐車場を再利用し、外来・職員のために南側に玄関を設け、児童はグラウンド側に昇降口を整備した施設配置を提案します。

### ○緑のネットワーク …〈歴史を残す・つなぐ〉

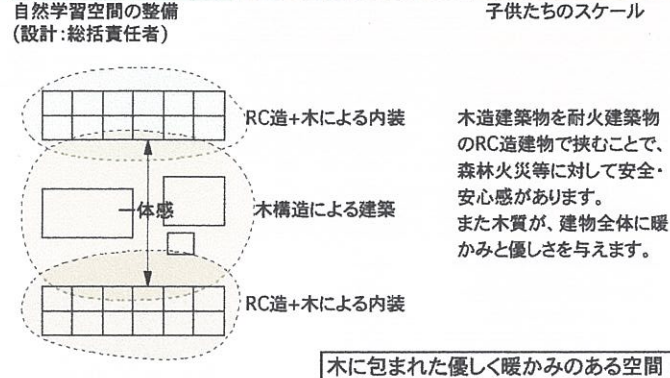
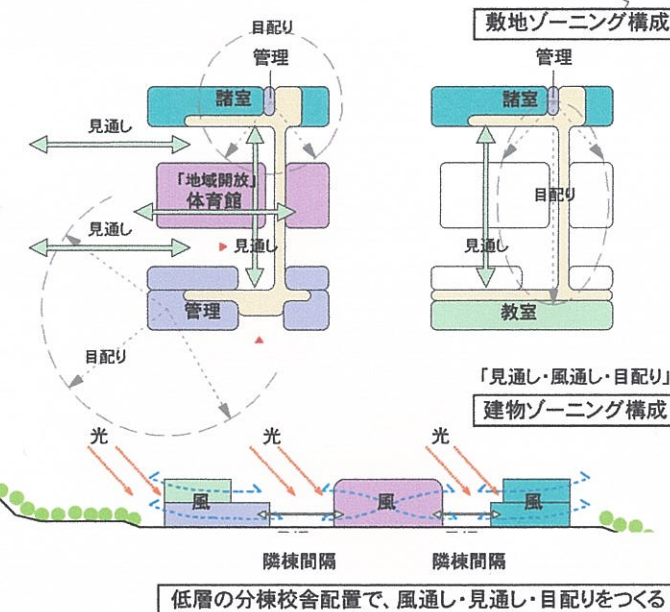
周辺や既存の緑と連続するような施設計画や植栽計画が大切だと考えます。既存管理棟や体育館の解体後は、緩やかな緑地や散策路あるいは外来者のアプローチ空間として再整備します。また季節毎に花を咲かせる樹種の選定やピオトープの整備など、遊びや学習の教材となる外構計画とします。特にここでは、古くからの手入れが行き届き、歴史すら感じ取れる解体予定校舎前庭を残し、連続的に一体化して計画し、自然学習ゾーンとして再整備することを提案します。

### ○視線のネットワーク …〈目配り・気配り〉

子供たちの生き生きとした活動や集いが見通せるように「見る・見られる」の関係をつくるオープンな計画とすべきです。この互いの見通しによって、校内に視覚的な連続性が生まれ、人々の目によって子供たちが見守られ、安心して利用できる「目配り・気配り」のある学校をつくり出します。特に平面計画での昇降口、階段付近には細やかな配慮が必要です。

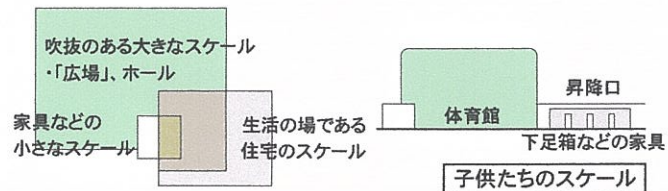
### ■元気な児童を育てる「広場」のある建築 …〈室内広場〉

自然の光、風を最大限に取り込むように、低層での分棟形式を提案します。東西に長い棟を並べ、地域開放可能な機能を中央に配置します。ここを「広場」のような場所とし、この広場からは教室や教室越しの屋外の様子までもが見通せ、校内の様々な活動のにぎわいがにじみ出てくるような、屋内グラウンドのような、活気のある遊びと学習の場を提案します。構造が木造となる体育館・武道場は、地元産の木材を多用しながら透明感のある計画として、施設中央部分に木による優しく暖かい空間を配することで、施設全体に落ち着いた連続感のある雰囲気をつくり出す計画とします。



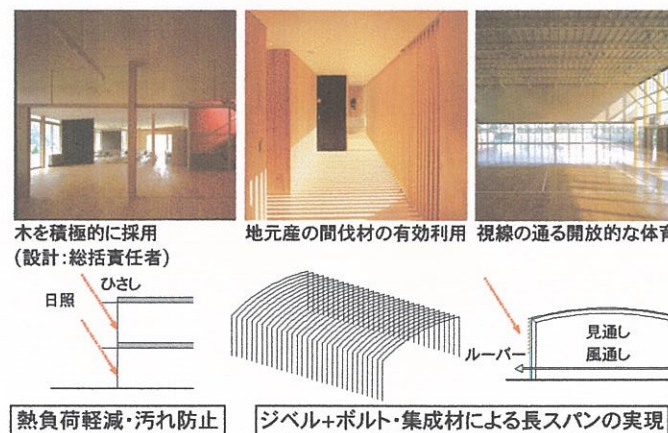
### ■「大きな家」

日々遊び、遊び、そして生活する場所である学校は、子供たちにとって記憶に綴る暮らしの場です。威圧感のないヒューマンなスケールを用いて、「家具などの小さなスケール」「生活の場である住宅のスケール」「吹抜けのある大きなスケール」を混在させた楽しい夢のある場所とする必要があります。また内部空間-半外部空間-外部空間という空間構成の連続性を基本としたいと考えます。



### ■木構造や、仕上げ材に地元産の木材等を利用

地産地消として、地元産の木材等を積極的に採用し、環境配慮に寄与するとともに、木材による暖かみある素材感を最大限に活用し、安らぎのある落ち着いた学習空間を創造する必要があります。今回の計画では、梁スパンが約20mとなりますが、ジベルとボルトを用いた集成木材構造などの実施でスリット状開口が考えられます。



### ■エコスクール…環境への負荷の低減を目指す

技術の発達した現代でも、自然的要因(光・風)を最大限に取り入れた空間を計画することが建築づくりの基本です。これを補足するための設備であり、新しい材料・技術であるべきだと考えます。太陽光発電、ソーラーシステム、蓄熱利用、中水道の利用などを導入して、省エネルギーで運営可能なエコスクールとしての整備が必要と考えます。

また、これらのことは、学習教材の一部として、体験学習のためにも、小規模でもよいから関係者と打ち合わせをしながら採否を決めたいと考えています。

- ①維持管理の容易な計画
- ②教育環境の変動に柔軟に対応できる将来を見越したフレキシブルな室配置、構造形式
- ③設備機器だけに頼らない、自然の採光・通風といった自然エネルギーの最大限の利用
- ④断熱・日射遮蔽等の負荷の抑制
- ⑤耐久性、無汚染性の素材の採用による建物の長寿命化などを考慮しながら、長きに渡り利用され、時間に耐える建築の実現に向けて取り組みます。

### ■防災拠点としての整備

雨水を貯蓄する中水道利用は、防災時の消火や雑用水のための水資源の確保として考慮に入れる必要があります。また、耐震構造設計上の係数でも十分な安全度を持って計画すべきです。これらの整備の技術的内容は、基本設計の段階で細かく検討し、関係者で打合せをしながら、必要なものは計画に盛り込んでいきたいと考えています。

### ■バリアフリー・安全

地域の核となる学校では、誰もが自由に活動できる人にやさしいユニバーサルデザインを採用する必要があります。ここでは、バリアフリーはもちろんのこと、EVの設置、渡り廊下の採用などにより、動線を立体化することで安全な利用と施設運営を可能とします。

